

図2 3年間の探究活動の概要

学年	1年次	2年次	3年次
教科	産業社会と人間 (2単位)	総合的な学習の時間 (2単位)	
授業名	Expanding Time	インターンシップ	Expanding Time 2
研究テーマ	【教科・科目】 各教科から提示されたテーマのなかから、自分の興味・関心に基づいて研究テーマを選択し探究	【就労】 就労に関するテーマを設定(インターンシップで調査・検証)	【世界】 基礎テーマ(※)のなかから興味関心に基づいてテーマを設定し探究
テーマ例	●数学→黄金比／三平方の定理／パズル ●社会→北海道の地誌／憲法／アイヌ民族 ●家庭→日高の食／保育の仕事／アイヌの被服	●仕事と出産の両立は可能か ●外国人と協働するには？ ●障害者雇用の実態について	●基礎テーマ「資源」→「山間地域に適した発電方法について」 ●基礎テーマ「観光」→「グリーンツーリズムの可能性」
活動	個人	個人	グループ

※=2年次は2018年度より、3年次は2019年度よりSDGsの17の目標を基礎テーマとする



浦河の魅力発信に取り組んだ3年生のポスター。

図3 活動評価票の例

ダウンロード可

平成30年度 3年次 課題研究(仮) スタッフと 活動評価		ユニークな学習活動		担当教員	担当学年
1
2
3
4
5

の位置付けを明確化。その内容は、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現という探究のプロセスを中心とし、産社も組み込んだ3年間の体系的なプログラムとして再編(図2)。16年度から全年度で一斉に実践をスタートさせた。

探究を発展的に繰り返すプログラムを体系化

1年次の産社と2・3年次の総学で、生徒は4つの探究の学習活動に取り

組む。それぞれの基本的なプロセスは共通だが、テーマや求めるレベルは異なる(図2)。

1年次産社の一部を利用して行う「Expanding Time」では、教科に関連づけた基礎テーマを学校から提示し、それを参考に生徒が各自の研究テーマを設定して個人活動として取り組む。例えば、数学を選択して「折り紙の考え」と宇宙科学や自動車技術などとの関連について探究するといった具合だ。

2年次前半では、3日間のインターンシップを組み込んだ探究の学習活動に個人で取り組む。「仕事と出産の両立は可能か」など、働くことに関わるテーマを設定。インターンシップ先では仕事の体験だけでなく、働く人へのヒアリングや現場調査も行い、事前に調べて立てた仮説の検証を行う。

2年次後半の「Expanding Time 2」では、社会課題に関する探究の学習活動にグループで取り組む。今年度の2年次からは、基礎テーマにSDGs(持続可能な開発目標)の17の目標を利用。「貧困をなくそう」「質の高い教育をみんなに」のような明確なゴールに基づくことで、単なる疑問の解消にとどまらず、具体的なアクションへとつなげる狙いだ。

3年次「Expanding Time 3」も同様の流れで、グループで地域(道内)の課題に取り組む。地域を支える人材の輩出につなげるという同校に期待される役割を踏まえ、2年次までは世界も

視野に入れてきた活動を、3年次であえて狭め、3年間の集大成として地域の社会的課題に取り組む。活動例をあげると、あるグループは浦河町の人口減少の問題に対し、高校卒業後の町離れを食い止めるための広報戦略を検討。地域の魅力を調べて記事を作り、地域広報誌に掲載してもらうよう働きかけた。また、別のグループは、災害時の備えについて住民アンケートや町役場へのインタビューなどの調査を行い、レポートをまとめた。

生徒自らのテーマ設定を徹底サポート

探究の学習活動を実践するうえで工夫について、探究の学習プロセスごとに見ていこう。

まず、最初の研究テーマの設定(課題の設定)は、同校が特に力を入れている部分だ。生徒が自らテーマ設定できるようにするには、教員の指導力が極めて重要となる。そのため、教員用の指導の手引きを作成して基本的な進め方を示したり、4月の教員研修に質問作りのワークショップ(ハテナソク)を組み込むなどしている。また、生徒が取り組む研究テーマは、担当教員とキャリア・ガイダンス部が二重に審査。少し調べればすぐ答えが見つかるようなテーマは、生徒に戻して再検討させる。なかには再提出を4〜5回繰り返す場合もあるが、単に突き返すだけでなく、

図4 単元配列表(2018年度・1年次の例)

年次ごとに、全科目の主体的・協働的な授業がどの時期に実施されるか、1つの表になっている。縦の点線で繋がる項目は、科目横断の連携授業。

ダウンロード可

NO.	教科名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1	国語総合			意見を書く	本文をもとに、意見を書く					自分の意見を書き、話す
2	現代社会	違いを知るためのグループ活動	選挙制度(模擬選挙)			障害者体験【家庭・福祉】(調)		共生社会に関してポスターセッション【資・発】		
3	数学IA			集合と命題(論理思考)	2次関数(手続き思考)					データの分析
4	化学基礎		蒸留・同素体などの実験							
5	体育		体力測定データのExcel集計【情報】					男女共修選択(器械運動)		
6	保健						健康の保持増進と疾病の予防【調】		精神の健康	
7	産業社会と人間	自己理解(宿泊研修)	ジョブリサーチ(職業観、探究初学)	論理的思考講座			思考ツール 論理思考	科目選択	探究学習	学習成果
8	音楽I			合唱			リコーダーアンサンブル		作曲活動	
9	美術I	VTS 静物デッサン	色彩学の基礎	ポスターの制作			立体凧の制作	フェナキストスコープ		
10	書道I									
11	コミュ英語I								異文化交流・年賀状作成【情報】	
12	家庭基礎	自己理解(エゴグラム)				共生社会【家庭・福祉】				
13	社会と情報	Wordの使い方	体力測定データのExcel集計【体育】						異文化交流・年賀状作成【英語】	音楽
14	LHR	生徒意識調査		学校祭に向けてのグループワーク		体育大会に向けて			インターネットを利用した情報検索の方法	



公民科と福祉科の連携授業
障害者体験を通じ、ダイバーシティや福祉の在り方について考える。



英語科と商業科の連携授業
英語で年賀状を作成。今年度は1年次英語科・商業科(情報)の連携で実施予定。

必要に応じてキャリア・ガイダンス部に面談してサポートする。「情報の収集」の段階では、インターネット検索だけで終わらせるのではなく、近隣の図書館と連携して幅広い文献を参照するよう指導。また、地域から

講師を招いて環境や福祉などに関する講座を設けるほか、生徒も積極的に校外に出掛けてフィールドワークを行う。

こうして収集した情報の「整理・分析」には、ベン図や座標軸などの思考ツールを積極的に活用する。1年次産社の前半に論理的思考方法に関する授業を行い、他教科・科目も連携しながらさまざまな授業場面で用いるため、徐々に使いこなしていくという。

最後に活動を「まとめ・表現」する際には、外部からの評価を受けることを重視。毎年2月に学習発表会を開催するだけでなく、「IBLユースカンファレンス」や「太平洋・島サミット」など関連するイベントがあれば参加を促し、自分たちの活動が全国的・世界的にはどのような価値があるかを知る機会をもてるようにしている。

こうした探究プロセスの区切りには、ルーブリックを取り入れた活動評価票を使って生徒が自己評価に取り組む(図3)。この活動評価票によって、各ステップで何ができるようにすることを目指しているか、教員も共通に理解することで、指導と評価の一体化を図っている。

単元配列表を作成し 教科を横断した授業を促進

同校のカリキュラム・マネジメントの特徴として、単元配列表の取り組みにも注目したい。同校の単元配列表は、

年次ごとに全教科・科目の主体的・対話的で深い学びにつながる学習内容を月別に並べ、その中心に産社・総学を置いたものだ(図4)。

同校の産社・総学は、目指す生徒像の実現に向けた教育活動の総括地点に位置付けられるが、各教科・科目の日常の授業では意識されにくい。しかし、単元配列表があれば、各教科・科目では産社・総学の探究の学習活動につながる学習をいつどのように組み込むと効果的かが見えてくる。例えば、国語総合では産社の学習成果発表の時期に合わせて「自分の意見を書き話す」授業を実施し、一方の産社では国語総合の授業を前提として発表に向けてより効果的な指導をする。このような、カリキュラム全体で探究の学習活動の充実に向かう取り組みができるようになった。

また、単元配列表は産社・総学以外の科目間の連携の動きも大きく前進させた。例えば昨年度は、公民科と福祉科が連携し、障がい者体験を通じて共生社会を考える授業を実施した。また、英語科と商業科(情報)の協働により英文の年賀状を制作して海外の高校に送るといった、新たな連携がいくつも始まった。単元配列表は前年秋に作成するが、実際に年度が始まると、計画外の連携も行われるという。「『しなくてはいけない』というやらされ感ではなく、『科目連携すると生徒の学びが深まる』と前向きに捉えて挑

図5 生徒アンケート結果 (2017年度)

項目	1回目 4月	2回目 12月
ボランティア活動や地域のイベント(行事)などに積極的に参加している	2.45	2.90
地域や世界との関わりについて考えたり、行動している(しようと考えている)	2.88	3.24
多様な生き方(進路)に関する情報について、主体的に収集・分析することができる	3.05	3.39
主体的に自分の生き方(進路)について、考え行動することができる	3.23	3.56
課題解決のために、計画的に行動することができる	2.93	3.25
日々の生活のなかで、自ら課題を発見し、課題を克服(しようと努力)することができる	3.14	3.44
どんなことも勉強になると考え、積極的に行動している	3.03	3.32
状況に応じて、進路を軌道修正することができる(しようと考えている)	3.20	3.49
自分の考えを論理的(筋道を立てて)に説明できる	2.96	3.24
大人の話に疑問点があったら、質問したり訂正したりする	2.98	3.22
自分の能力(自分が何を知っていて、何ができるか)を客観的に把握している	3.17	3.39
状況に応じて、感情や行動をコントロールできる(怒りやいら立ちがすぐに顔や態度にでない)	3.15	3.36
課題を解決する方法を試行錯誤しながら探ることができる	3.25	3.46
自分の可能性を信じている	2.84	3.02
相手の立場や考えを理解し、発言や行動する	3.40	3.53
保護者や教員の言っていることに間違いもあると思う	3.38	3.51
年齢や性別が異なる相手とも協力して行動することができる	3.40	3.52
自分の置かれている状況を理解し、その場に応じた発言や行動ができる	3.34	3.45
何事も大人や教員から言われたとおり、行動するほうが良いと思う	2.09	2.15
わからないことやできないことは、そのままにする	2.03	1.94

*あてはまる4点・やあてはまる3点・あまりあてはまらない2点・あてはまらない1点として調査し、平均値を算出。1回目と2回目増加ポイントの大きい順に並べ替えたもの。主体性・積極性に関わる項目を太字で示している。

図6 浦河高校コアルーブリック (2018年度)

ダウンロード可

平成30年度 北海道浦河高等学校 コアルーブリック				
校則	評価する能力	ルーブリック(評価指標)		
		4	3	2
自主	関心・意欲・態度	物事のあるべき姿と現状のギャップについて把握し、意欲的に解決策を構築している。	物事のあるべき姿と現状のギャップについて把握し、解決策を構築している。	物事のあるべき姿と現状のギャップについて把握し、解決策を構築している。
	知識・技能	知識・技能を統合・比較し、新しい知識・技能を築ける。	知識・技能を統合・比較ができる。	知識・技能を身につけている。
	思考力・判断力・表現力	自分の考えをまとめ、他の考えとの共通点や相違点等を他者に分かりやすく表現できる。	自分の考えをまとめ、適切に表現できる。	自分の考えをまとめられる。
敬愛	想像力	経験や想像をつなげながら、既述立てて予想ができた結論を導き出しすることができる。	既述立てて予想ができた結論を導き出しすることができる。	知識や経験をもとに既述しをもつことができる。
	協働性	自分の役割や責任を理解し、他者との協働や交流を通じて、リーダーシップを発揮し、チームが力を発揮できる。	自分の役割や責任を理解し、他者と協働して行動できる。	自分の役割や責任を理解し、行動できる。
	社会性	自分と異なる考え方や行動をする人たちがいる多様な社会を理解し、行動することができる。	自分と異なる考え方や行動をする人たちがいる多様な社会について、理解している。	自分と異なる考え方や行動をする人たちがいることを理解している。
	達成感・満足感	自分の定めた目標を達成し、満足感を感じている。	自分の定めた目標を達成することができた。	自分の定めた目標を持っている。

戦する先生方が増えている証拠ではないでしょうか(佐藤先生)

積極性、主体性に関する生徒の自己評価が大幅アップ

2年間の学校改革の推進のなか、主体性に課題があった同校生徒の様子が変わってきたという。教員が日常的に感じている手応えは、データにも明確

に表れている。20項目の行動・態度についてできているかを聞いた、昨年4月と12月のアンケート結果を比較すると、ほとんどの項目で上昇がみられた(図5)。特に、「地域の活動への積極的な参加」や「自分の生き方への主体的な考え・行動」など、積極性や主体性に関する項目が伸びている。

進路決定への取り組み方も今までと

は異なる。昨年度、単に資格取得のためではなく探究の学びを楽しみたいと言って進学したり、重なる不採用にも諦めずに挑み続けて最後は希望の職種に就いたり、強い意思をもった進路決定が目立つように。また、大学などの自己推薦書には、探究の学習活動の内容や成果を自ら記入する生徒が大幅に増加。それが入学者選抜に良い影響があったのではないかと。

「これまでは何を言っているかわからないという生徒も少なくありませんでした。それが今、多くの生徒が非常に具体的に探究の学習活動の経験を書けるようになったのは、自分で考え行動

システムとして定着させ全教員で取り組んでいく

さらなる進化に向けて課題もある。そのひとつとして佐藤先生があげるのは、目指す生徒像に向かうための評価の仕組みを整備することだ。今年度初頭に、学校目標に紐づく9つの資質・能力についての「コアルーブリック(コモンルーブリック)を作成(図6)。目指す生徒像への到達度の基準を具体的に示した。今後は、これを基盤として各教科・科目や学校行事、クラス運営などにおけるルーブリック作成も進めていく計画だ。

また、2年間で立ち上げてきた同校カリキュラム・マネジメントに基づくさまざまな実践を、教員個人の力に頼るのではなくシステムとして根付かせることも、これからの課題となる。

「カリキュラム・マネジメントは、一部の誰かではなく全員で取り組むものです。そのために、まずは全教員が学校教育目標を空で言えるような状態を目指していきます。しかし、必要な教育実践は永遠ではなく、時代の変化によって変わっていきます。目の前の目標に向けて邁進すると同時に、長期的な教育の方向性も見据えて対応していきたいですね(吉瀬校長)